翻刻

『宝暦十一年辛未嶺松和歌集』其十

A print of Reishôwakashû Vol.10 manuscript

千葉真也

キーワード　本居宣長、歌会、嶺松和歌集

本居宣長の「松坂に於ける活動母体となった歌会」[1]である嶺松院歌会の記録の中で、はじめて『嶺松和歌集』と表紙に記した『宝暦十一年辛未嶺松和歌集』[2]を翻刻する。

宣長は宝暦七年十月、京都での遊学を終えて松坂に帰郷し、医師を生業としながら和歌や学問にうちこみ、宝暦八年二月、菩提寺である樹敬寺の搭頭、嶺松院における歌会に参加するようになる。宣長は宝暦十一年ごろから歌会で指導的な役割を担うようになったと考えられており、『石上稿』を見ると宝暦十三年正月十二日の嶺松院歌会で歌の題を出したことが記されている。

嶺松院歌会の記録は、宣長を考えるための重要な資料である。宣長自身の作歌については家集である『鈴屋集』や毎年の詠歌の記録である『石上稿』など豊富な資料があり、正確な翻刻も行われている。[3]だが、宣長の和歌は自身の詠作に尽きているわけではない。嶺松院歌会は、享保八年から文化五年まで中断を挟みながら続けられ、歌会の記録は、二十四冊が伝わっている。[4]それは、指導者としての宣長を考える材料を提供し、宣長周辺の人物について月ごとの情報を与えてくれる可能性のある資料である。後年の著作『玉あられ』で誤用として指摘するような例も、この記録に見える。この巻でいうと、六月十一日の歌会では「簾」の意味で「こす」を用いた作品が五首見られるのが、その著しい例である。

だが、吉田悦之氏が嶺松院歌会を含む歌会の詠草を取り上げている[5]のを例外として、嶺松院歌会は、ほとんど検討されていない。筆者は平成二十六年四月の第三十一回鈴屋学会大会研究発表会で『石上稿』の錯簡が『嶺松和歌集』によって訂正できること、『石上稿』に漏れた歌を採集できることなどを報告し、[6]さらに平成二十八年四月の第三十三回鈴屋学会大会研究発表会においては、嶺松院歌会での出題（歌の題を出すという意味である）の種本である『古今題意』について従来、知られていなかった出典を追加することができた。[7]今回は、宝暦十一年正月から宝暦十二年閏四月までの歌会を収めた「其十」を紹介する。歌会の参加者のうち小津正啓（まさひろ）、中村光多（みつ

な）、須賀直躬（なおみ）、稲懸棟隆、浜田明達、覚性院戒言などは宣長の最初期の門人である。宣長の号はこのころ「シュンアン」であるが、「春庵」「蕣庵」「舜庵」と三通りに表記されているのも興味深い。巻末に歌合わせの記録があるが、割愛した。反復記号は使わず、文字も、なるべく通用の字体に改めるようにした。だが、「二十」の意味の「廿」は頻出するのでそのままにしている。また、「００１」以下の数字は丁付を示すために千葉が補ったものである。

貴重な資料の翻刻をお許しくださった本居宣長記念館に、末筆ではあるが御礼申し上げる。

注

（１）『本居宣長事典』（東京堂出版　二〇〇一）の「嶺松院歌会」の項。

（２）表紙には「嶺松和歌集」とか「詠草会集」などと記されている。宝暦十一年以後は、おおむね「嶺松和歌集」である。今回翻刻した資料を含め、嶺松院歌会の記録は本居宣長記念館の所蔵である。

（３）これらは、もっとも簡単には『本居宣長全集』第十五巻（筑摩書房一九六九）で見る事ができる。

（４）注（１）に同じ。

（５）吉田悦之「宣長詠草攷」（『鈴屋学会報』第十五号　一九九八）

（６）「『嶺松和歌集』と『石上稿』」

（７）「本居宣長と類題歌集」

【翻刻】

宝暦十一年辛未
嶺松和歌集
其十
００１
正月十二日会頭　明達
初春祝道
花になく鶯までも此道のさかゆく春を祝ふ初声　舜庵
色に香に咲や此花いく春か猶さかへ行難波津の道　正啓
あめつちの恵をよもに敷島の道より早く春や来ぬらん　光多
長閑なる春をむかへて敷島の道ある御代をあふく諸人　直躬
跡とめて春は来にけり万代も契かはらぬしきしまの道　棟隆
あさみとり霞を空に敷島の道そさかへむ千代の初春　明達
００２
同日　探題
野夏草　棟隆
夏深くしけりにけりな草の原分行人の道まよふまて
径夏草　正啓
ふみなれし花の木陰の通路もまよふ斗にしける夏草
庭夏草　明達

花ゆへにとひ来し人もなつ草の通路絶る庭の木の本　舜庵
瞿麦露
むつましきわか国の名の撫子に言葉の花の露やかけまし　直躬
翫瞿麦
ませの内に咲初しより朝な夕なめつる心も床夏の花　光多
雲間夏月
風通ふ木の間涼しく雲晴て月もくまなき夏のよの空
００３
正月廿五日兼題
名所鶯
うちはへて世はのとけしや春の日のかすかの野辺のうくひすの声　春庵
みよしのやけふより春を白雪の古里にしもきなく鶯　正啓
春もまた浅間の山のかけ寒み谷の戸深く鶯そなく　棟隆
梅に来て囀る声も百敷や三垣か原の春の鶯　光多
００４
同日兼題
伝聞恋
一めたにまた見ぬ人も人伝に聞面かけの思ひやられて　春庵
一めみは後いかならん人伝に聞さへかかる袖のなみたは　正啓
目にいまたみねよりおつる瀧の糸の声に聞つつ思ひみたるる　棟隆

尋みるよるへもなしや浦舟のほのかに人のいひし斗は　光多
００５
同日当座
水辺夏月
手に結ふ庭の清水にかけみえて涼しさそふる夏の夜の月　直躬
竹間夏月
くれ竹のは末みたるるかけ見えて吹風すすしなつのよの月　戒言
枕上夏月
すすしとやしはし片敷手枕に程なくしらむ夏の月影　棟隆
夏月易明
柴の戸にしはしと思ふ月影のさす程もなく明る夏のよ　春庵
遠村蚊遣火
たえたえになひく煙の一すちや遠山本の里の蚊遣火　正啓
００６
二月十一日兼題
若艸漸青
霞かはのへの草はも日にそへて春のみとりそふかく成ゆく　葬庵
春もまた朝日にむかふかたへのみやや青みゆく庭の若草　正啓
遅くとくややもえそむる色わかみ青野原の春の下草　光多
００７
同日兼題
垣夕顔　直躬

哀也ふるき垣ほに咲かかる露をふくめる花の夕顔※顔→顔　正啓
蓮露似玉
吹渡る風の蓮葉池水になひけは露の玉そこほるる　光多
野蛍
消やらぬ思ひあれはか烏羽玉のよるよる野辺にともす蛍は　棟隆
沢蛍
影移る己か光にあくかれて野沢の水に蛍とふ也
００８
橋蛍
乱ちる玉かと見えて東路の緒絶の橋に蛍飛かふ　蕣庵
河蛍
川竹のうきふししけき思ひかも流にすたく夏虫の影　明達
光多
二月廿五日兼題
朝春雨
音もせてよのまはしらぬ朝戸ての庭しめやかに春雨そふる　春庵
夜のまより軒の雫の音もせて長閑にそふるけさの春雨
とのゐして見るも淋しや朝沓の音も音なき庭の春雨　正啓
霞しく空よりやかてくもる夜の明行ままに春雨そふる　光多
００９
待書恋
頼まれぬ人とは見れと一たひの言の葉をたに待えてしかな　棟隆
なをさりの水くきをたにえてしかなよしや涙はなかれそふ共　春庵
逢事は泪の露の玉章をまつに付ても袖ぬらしけり　正啓
ふみ通ふ道さへ遠き我中はつねにまたるる水くきの跡　棟隆
二月廿五日当座
江蛍
枝枝にもゆる思ひも見しま江の芦間を分て蛍飛也　直躬
蛍過窓
飛蛍光もよそに過ゆけはよるの学ひの窓にかひなき　光多
蛍点叢
夕やみに露の草村風こえて消ぬ光や蛍成らん　春庵
氷室忘夏
都には吹くる風やまつか崎ひむろの山は夏もしらぬを　正啓
０１０
三月十一日兼題
風閑花芳
匂ひくるたより斗にしられつつふくも長閑き花の下風　春庵
梢より霞にもれてかほる也吹とも見えぬ花の下かせ　正啓
長閑なる春風とても吹そうき色香にあかぬ花の木かけは　光多

０１１
山さくら枝はならさて花の香をさそふ斗の春風そふく
同日当座
夕立風　正啓明遠
浦風の吹一かたに雲こりて夕立すらし波の遠こち
夕立雲　直躬
山の端にかかると見つる村雲のやかてふりくる夕立の雨
山白雨　棟隆
時間にくもかきくらし鳴神の音羽の山を過る夕立
野白雨　光多
一村の雲をさそひて風早み遠里小野の夕立の空
０１２
湊夕立　正啓
舟出待浦の湊の浪風に雲をふかめてかかる夕立
山裏蝉　春庵明遠
山ふかみおちたきつせにひひきあひてこかけ涼しきせみの諸声
三月廿五日兼題
暮春蛙　舜庵
山吹もちりて蛙の声はかりさひしく残る春のかはつら
くれ深みすたく蛙も行春やうきぬの池にみかくれてなく　正啓
雨そそく汀の草のみかくれに蛙も春を惜てやなく　光多
０１３
同
被妨恋　舜庵
いくとせか雲ゐの鴈の声をたにきかてなかむる秋の夕きり　正啓
年をへて猶こえわふる逢坂や関守人のいつゆるすらむ　光多
同日
当座
うらめしや人の物いひさかなさに頼めし中もへたて社すれ
遠村蝉　春庵明遠
入日さす里の梢を風過てここに涼しきせみの諸声
閨中扇　舜庵
わするなよ時にあふきもなれぬれは秋風ちかき閨の契を
夕納涼　光多
さらに今ならす扇もならの葉の木陰涼しき夕暮空
松下待風　棟隆
たへかたき暑さいとひて秋風を松の木陰にしはし休ふ
０１４
対泉避暑　正啓
吹風を松の木陰に立よれは下行水の音そ涼しき
樹陰隣秋　直躬
うちそよくこの下かけの涼しさは秋やたつたの森の夕風
四月十一日兼題
貴賤更衣　正啓
いやしきもよきもひとへに立かへてへたては夏の蝉の羽衣　光多

夏に今朝かふる袂は白重かみなかしもの色もわかれす　直身

雲ゐかは賤かふせやも夏来ぬとけふぬきかふる麻の葉衣　千代女

名残なくけふは高きもいやしきもひとつ色なる白重して

０１５　春庵

くらゐ山霞の衣立かへて峯も麓も夏のいろなる

同日当座

河夏祓　正啓

みな月や流るる麻のゆふ葉川夕べすすしくみそきすらしも

風告秋使　棟隆

軒近き荻の上葉に音つれて身にしむ風や秋を告らん

閑中秋来　直躬

たへてすむ柴の庵の淋しさも今更まさる秋は来にけり

愁人迎秋　春庵

初風も何今更におとろかむうき身はいつも秋のこころを

０１６　千代女

初秋風

せみの羽のひとへに待しすすしさも袖に覚ゆる秋の初風

初秋雲　春庵明達

吹かはる風にたたよふうき雲も秋を見せたる夕くれの空

初秋露　光多

秋きてもまたひとへなる衣手に露置初る今朝の朝戸出

四月廿五日兼題

加茂祭　正啓

宮人もけふのみあれを待えてやあひにあふひをとりかさすらん　光多

ちはやふる神と君との二葉草かけてそ頼む加茂の宮人　千代

もろは草かけてそ頼む加茂川の深き心を神や知るらん　蕣庵

ひきつれて葵かさせる諸人の行来もしけくみたらしの影

０１７

同日兼題

恨媒恋　正啓

われにうき人よりも猶中たちのつらき心をうらみ社すれ　光多

身のとかと思ひなしても中たちをつれなきままに恨こそすれ　千代

今はまたつれなきままに中たちをかことになしてうらみもやせん　蕣庵

ほとけとも神とも頼む中たちのつらき心はいふかひもなし

同日当座

初秋涙　直躬

桐の葉はまたしき秋の初風におつるは袖のなみた成けり

山初秋　春庵

吹かはる音にもそれとしら鳥のとは山松の秋の初風

杜初秋　光多

今朝は早木の間に風の音つれて生田の森に秋は来にけり

六

海初秋
いつしかと沖つ白浪立そひて浦半すすしき秋の初風　棟隆
０１８
残暑如夏
秋来ても夏かと思ふあつさには猶吹風を松の下庵　正啓
待七夕
いく秋も天の川なみ立帰りつきぬ逢瀬を待わたるらん　千代女
七夕風
秋風の身にしむ音を七夕のこよひ斗やよそにきくらん　春庵明達
五月十一日兼題
会頭　正啓
郭公数声
夏くれは信田の杜の千枝よりも鳴声しるき山時鳥　舜庵
此比はすまや明石の浦馴て波の間なくも鳴時鳥　光多
行返りけふを五月のほととぎす遠道かけていく声も鳴　千代女
時鳥待夜すくせしうさも今わする斗にをち返り鳴　直躬
余所に鳴声をもここに聞そへてかそへてあきぬ山時鳥　正啓
０１９
同日当座
七夕雲
天つ空くれ待星やけふもなを雲のはたてに物おもふらん　直躬

七夕橋
秋ことに尽ぬ逢瀬や天川紅葉の橋を行かへるらん　千代女
七夕衣
秋のきて稀にあふ夜は七夕の妻恋衣かへさてやぬる　正啓
七夕舟
彦星の此夕暮をまち渡る月日も遠き天の川ふね　春庵棟隆
０２０
七夕別
哀とや今朝は見るらん天河よせては返る浪の名残を　光多
田上稲妻
風のをとも涼しきよひの稲妻に田面の露の乱れちる見ゆ　舜庵
暁荻
夢ははやさめし枕の暁になをしもさはく荻の上風　代戒言明達
五月廿五日兼題
暁水鶏
ささぬ戸をたたく水鶏に驚けはうたたねなから暁の空　舜庵
暁に覚て又見る夢もなしたたく水鶏に驚かされて　光多
山かつら暁かけておきゐるとしらて水鶏の何たたくらん　棟隆
天の戸を猶しもたたく水鶏かな明ぬと告る鳥は鳴とも　直躬
０２１
戸さししてぬるまも夏の暁に何をかたたく水鶏なりん（ママ）　千代女

有明の月のさし入槙の戸をたたく水鶏も心ある也　正啓

同日兼題

洩始恋

すり衣忍ふ思ひもあらはれて乱そめぬる袖の上の露　舜庵

涙にはしのふ心のまけやせんもらさはうしといひつつも猶　光多

物思ひありとや人のとふまては忍ひもあへすもらすはかなさ　棟隆

池水のいひいてかたく忍ふにも猶恋しさにもらしそめつれ　直躬

022　千代女

もれそむるうき名をいかていとふらん忍ひはつへき身にしあらねは　正啓

みてもしれもらしそめぬる一ことは深き思ひの水くきの跡

同日兼題

朝荻　代　棟隆

しらみゆく軒はに秋の音つれて朝戸出さむき荻の上風

夕荻　光多

ふく風にのきはの荻の音きけは物にまきれぬ夕さひしも

夜荻　千代

のき近きおきのうははに通ひきて枕になるるよはの秋風

独聞荻　正啓

ひとりぬるよはの手枕風こえてきくもさひしき荻のはの音

023　直躬

荻催涙

ゆふまくれ荻のうははを吹風によそなる袖も露そこほるる　舜庵

荻似人来

秋風のおきのうははをふくことに人のとふかと驚かれぬる　棟隆

栽萩

たちよりて秋はきて見ん人もかなうへしかひある萩の錦を　舜庵

六月十一日兼題

蛍火透簾

小車のすたれの内もすきもののいるる蛍の火にや見ゆらん　正啓

さよふかみやり水ちかくとふ蛍こすのひまもる影の涼しさ　光多

月ならてかくれぬこすのうちよりも見えて蛍の影そ涼しき　淳文

雁金のきぬるをまたて飛蛍光をかくす玉たれの内　千代女

更るよにとふや蛍のすき影にこすのまちかく見えて涼しき　直躬

こすちかくとふや蛍のすき影を見つついそかぬよひの灯　棟隆

風にちる露かと見れは玉たれのこすの外面に蛍飛也

024　正啓

同日当座

萩半綻

朝露もをきあへぬ間にかたえよりほころひそめし秋萩の花　光多明達
野外萩
月影によるさへ見よと白露の玉をかされる宮城野の萩　直躬
古郷萩
ふる里に秋はきて見よ都人錦にまがふ萩の盛を　戒言明達
萩散風
さらてたにうつろふ比の夕風に露よりもろき秋萩の花　春庵
０２５
山女郎花
秋にあふをみなめし社哀なれ心あた成おとこ山とて　戒言
野女郎花
女郎花はかなきのへの夕露に心あさくやなひきふすらん　代直躬棟隆
蘭薫枕
ぬきかけし人はこぬよもふちはかまそれかとにほふねやの手枕
六月廿五日兼題
江夏月
０２６
同日兼題
馴増恋
０２７
同日当座
荒籬蘭　正啓
ぬき捨し主は誰そも藤袴あるる垣ねに吹かかりけり
薄未出穂　棟隆
思ふ事いかにしのひてしのすすきまたほに出ぬ秋の夕くれ

風前薄　光多
誰となくほに出てまねく花薄おもはぬ人も風にまかせて　千代女
行路薄
ゆきかよふのへのをすすきほに出て草の袂になるる秋風　直躬
古砌薄
かひなしや古きかきほの花すすきまねくにとへる人しなけれは
０２８
花似袖
花すすき風にかたよる秋の野はゆきかふ人の袖も別れす　春庵
七月六日兼題
会頭光多
新秋露滋
置そへてきのふの露は朝戸出の庭の草はに秋そしらるる　正啓
夜をこめて置そふ露の玉笹の光さやかに秋はきにけり　棟隆
秋きぬと目にもさやかに置露の光をみかく野への玉笹　直躬
真木たてる山も新野の草草もなへて露けき秋はきにけり
０２９
今朝はしも秋としらせて萩の葉にいとと露社置まさりけり　千代女
けふは秋の哀しりてや心なき草木かうへも露そ置そふ　光多
同日当座

刈萱乱風
露結ふ程もあらしな夕風にたえすみたるるのへのかるかや　直躬
槿不待夕
はかなしなさもくれやすき秋の日の夕影をたにまたぬ朝顔　春庵
草花露
めつらしな花に心ををく露のあたの大野の秋の千草も　光多
浅茅露
此比の秋の哀は夕風に露吹結ふ庭のあさちふ　棟隆
０３０
蓬生露
朝またき秋風通ふよもきふにみたれあひたる庭の白露　正啓
七月廿五日兼題
古郷薄
０３１
同日兼題
早疑恋
０３２
同日当座
０３３
八月十一日兼題
会頭千代
月添秋思
秋といへは夕へ露けき袖上にやとれる月も思ひ添けり　春庵
正啓
光多

うき秋の千代を一よに重ても我世ふけ行月をしそ思ふ　千代
０３４
起居つつひとりなかむる袖上にいとと露けき秋のよの月　直躬
棟隆
いつとても秋の哀はかはらしを月見るよはの袖そ露けき　千代
同日当座
苔径露
里遠み人もかよはぬ草陰は露さへ涼し苔の下道　春庵
草庵露
哀うき秋の末のの夕露のをきところなき草のかり庵　光多
袖上露
哀うき秋のならひか夕くれの物思ふ袖に露そ置そふ　千代女直躬
枕置露
物思ふ涙の露をしきたへの手枕寒きねやの秋風　直躬
０３５
関路秋風
さむけさもいとと身にしむ音羽山関吹こゆる秋の夕風　棟隆
幽居秋風
さほ鹿の声吹さそへすみ侘し柴の戸たたく秋の山風　正啓
八月廿五日　兼題
霧中鴈
声すなりよ深き霧のまよひにも雲路たとらて鴈やきぬらん　正啓
春庵

たれ見むと思はぬ鴈の玉章や雲にかきけつ霧の迷は　光多

０３６

人しれぬたか玉章かかけてこし夕霧かくれわたる雁かね　直躬

かへるさも霞にきえし雁金の又くる空にへたつ秋霧　棟隆

幾つらそ天津み空に声はして霧にへたつる秋の雁金　千代

同日兼題

俄変恋

朝露のひる間に色そかはりけるこよひといひし人の言の葉　春庵

飛鳥川あすともいはしくれ竹の一よにかはる心ならひは　正啓

あやしさようきふしもあらて呉竹の一よの程にかはる心は　光多

０３７

かねてよりかはし置つる言の葉も一よにかはる秋の夕露　直躬

なかれてとたのめし中もくれ竹の一よにかはるみつくきの跡　棟隆

同日当座

閨中秋風　千代

馴てきく柴のあみ戸の明暮にさひしさまさる秋風のをと　正啓春庵

秋風満野　直躬

みたれふす草の葉毎に露ちりてのへもかきらす秋風そふく　正啓

秋風入簾

きのふけふ秋をしらせて玉たれのこすのひま吹風そ身にしむ　直見

尋虫声

いつかたに分て尋ねんここかしこ聞すてかたき野への虫のね　光多

０３８

虫声滋

草しけみ秋の末のの露よりも哀そ深き虫のこゑこゑ　棟隆

雨後虫

村雨のふり行跡の白露をのかなみたと鈴虫の鳴　舜庵

九月十一日兼題　行司直躬

鹿声近枕

山ちかみあらしの枕たつねきて里の寝覚をとふ鹿の声　正啓

秋のよの寝覚のまくらそはたてて聞は軒端になく鹿の声　光多

山の名の嵐につれてまちかくも枕かみ成棹鹿の声　棟隆

寝覚するよはの枕はさむけれと鹿の音さそふ秋の山風　千代

秋風もやや寒からしうは玉の夢の枕に鹿そなく成　直躬

声のみか落葉ふみしたく音なひも枕にしるき庭の棹鹿

０３９

九月廿五日兼題　行司直躬

暮紅葉

夕はへの色さへそひて唐錦たたまくおしき紅葉葉の陰　舜庵

露時雨四方の梢をそめそめて夕くれ深く見ゆるもみちは　正啓

山端の入日の陰のなこりにて薄紅に匂ふもみちは　棟隆

見るに猶色社まされもみちはも時雨て後の秋の夕は　千代女

山姫の夕日に染る唐錦をりはへ秋の色は見せける　光多

もみちせしとはかり見えてうすきこき色はわかれぬ夕くれの山　直躬

０４０

同日兼題

後悔恋

こひつつもわたらてやまは思ひ川後のうきせに袖はぬれめや　舜庵

山ノ井の浅き心をしらすしてむすひ染ぬる契くやしも　正啓

ちかひてし人の命はをしからてわすらるる身そ今はくやしき　光多

いとはるる身を白露のはかなくも結ひ置ける契くやしき　棟隆

つらからん後をもしらて今更にとけし心そくゐのやちたひ　千代

あた波のかかるとしらてそなれ松※この続きなし　直躬

０４１

同日当座

深更虫

をきまさる蓬か露に月更て鳴音もすめる庭の松虫　直躬

旅店虫

露ふかきのへの笹やのかり枕袂ぬれそふよはの虫の音　正啓

叢底虫

よを寒み露の籬の草かくれ人まつ虫も起あかすらん　光多

床下虫

蛬鳴音も霜もさえわひて夢は結はぬ片敷の床　春庵

枕辺虫

秋のよの哀しりてや蛬なれも枕の下に鳴らん　棟隆

０４２

虫思

行秋をととめかねてや道のへに思ひみたるる虫の声声　秀覚千代

十月十一日兼題　行事　棟隆

落葉驚夢

中たえぬくめちにわたすそれならて木葉ちるよのゆめのうき橋　春庵

おちつもる木の葉のをとに寝覚して嵐吹よは夢も見はてす　正啓

幾度か夢おとろかす冬のよの風の木葉の窓をうつこゑ　光多

０４３

ちり敷やよはの手枕風こえて夢おとろかす庭の紅葉々　千代

冬の夜は夢も見果す紅葉々の窓うつ音に驚かされて　棟隆

同日当座

虫怨

草深き秋のすゑのの真葛葉のうらみかすかすなく虫の声　光多

深山秋夕

山深きすみか故かと淋しさをとははや人に秋の夕くれ　直躬

海辺秋夕

あしやかた夕霧深し海士人の我すむ方も道たとる迄　戒言千代

覊中秋夕

旅衣日も夕暮に鳴海潟うら吹秋の風そみにしむ　正啓

０４４

秋夕傷心

かなしさは露も時雨もその事となみたわかれぬ夕くれの空　舜庵

秋夕催涙

なかむれはうき秋風の身にしみて涙もよほす夕暮空　棟隆

十月廿五日兼題　会頭　棟隆

岡寒草

見し花のおもかけ残る霜かれは秋を忍ふの岡の冬草　春庵

虫の音もいつしかかれて岡の辺の一むらすすき霜さゆるなり　正啓

秋よりもみきはに残る色そなき霜を岡への草の冬かれ　光多

見し秋の形見なれはかみつくきの岡の萩原霜に枯なて　千代

０４５

此比はみとりの色も水くきの岡の冬草霜かれにけり　棟隆

同日兼題

云切恋

池水の浅き心をうらむとていひはなつにも袖はぬれけり　春庵

かきりそとかきはやれともあやにくに深き思ひは残る水くき　正啓

今はまた涙にくもることはなく是を限とあり明の月　光多

０４６

うしや猶かねて思ひし中なれは今をかきりと人の言の葉　千代

たのましといひてやみなんうらみてもせめてつれなき人のこころは　棟隆

同日当座

秋田風

小山田の稲葉乱て白露は結ひもはてし秋の夕風　棟隆

秋田露

もりあかすわさ田の稲葉風なきて露おもけなる秋のかり庵　光多

草庵秋雨

ふりくらす草の庵の秋の雨は音せぬよりも淋しかりけり　直躬

秋雨打窓　舜庵

秋のよも風によこきる村雨の窓打ねやの夢はみしかし

０４７

山鹿　光多千代

山深み杣木ならねと我方に引やを鹿の妻やこふらん

谷鹿　正啓

明くれに物淋しくもきこゆ也谷の戸深くなく鹿の声

十一月十一日兼題

池水鳥多　正啓

むれゐつつうきねの床に霜はらふ羽風もしけき池の水鳥

さゆるよもむれてあかすや行めくりあそふすかたの池のをし鳥　光多

音さむし羽風になみやさはくらんむれて立ゐる池水鳥　棟隆

０４８

あし鴨のすたく汀や氷るらんなく音もさゆる庭の池水　千代

冬の池もこほらさりけり水鳥のあまたおりゐてさはく汀は　舜庵

同日当座

野鹿　舜庵

萩か花ちるらん小野の夕露に濡て妻とふ棹鹿の声

田鹿　光多

山田もる賤かかりほにまちかくもいく夜か馴るる棹鹿の声

磯鹿　棟隆

山ちかきあら磯なみのよるよるは妻こふ鹿の声そ聞ゆる

寝覚鹿　正啓

きくもうし夜のね覚の手枕に泪なそへそよはの鹿のね

０４９

鹿声遠　棟隆

吹をくる夜はの嵐の鹿のねはいく重の峯をへたててか鳴

鹿声近　直躬

萩の露ひるまも馴て鹿そ鳴人め稀成露のまかきに

十一月廿五日　兼題　会頭　舜庵

霜夜鶴　正啓

むしろ田に冬の夜寒みをく霜を敷やかさねん鶴の毛衣　光多

冬くれはからぬひつしもかれ果て霜夜にたてる小田の芦田鶴　棟隆

さゆる夜のふけ行ままにをく霜をはらひかねてや田鶴の鳴らん

０５０

置そふる霜の毛衣さえぬらし小夜更行は田鶴さはになく　直身

風さゆる霜にやいかにさむからん鳴音わひしきあし田つの声　千代

空さえて霜くもるよはいととしき心のやみにたつそなくなる　春庵

十一月廿五日兼題

難忘恋　正啓

わすれんと思ふ物からあやにくに身をはなれぬは人の面影　光多

わすられぬ身にかえなまし忘草生てふゐなの道しるへして
０５１
雲は袖花はすかたによそへてんなかめにふれて忘かたしや　直躬
よしさらは忘れんとすれとあやにくに猶忘られぬ人の面影　千代
夕くれも思ひたえにしよもきふにわすれんとすれは松むしの声　春庵
十一月廿五日当座
鹿声両方
かはらすよ秋の山路の二かたに聞わく鹿も同し哀は　直躬
鹿声何方
なく方もそことわかれぬ鹿の音はさそふ嵐や吹まよふらん　棟隆
鴈初来
越路より遠山かつら夜をかけて今朝は都へ鴈のきぬらん　光多
風前鴈
山風に空とふ鴈のさそはれておもはぬ小田に落る一つら　直身
０５２
雲端鴈
薄墨の文字かと見えて夕くれの雲にまきるる鴈の玉章　正啓
霧間鴈
天つ鴈たえたえ見えて声斗一つらつつく霧の遠かた　春庵
十二月十一日兼題
浦雪混浪
打寄るなみかあらぬかしら雪のよはにつもりのうらの曙　春庵
よそめには浪かとそ見る二見潟雪よりあくる浦の松原　正啓
音さえて浪もひとつに見ゆる哉雪は津守の浦の蜑人　光多
磯のなみよするとや見む東路の田子の浦半にふれるしら雪　千代
０５３
同日兼題
旅歳暮
もろともにこえゆく年よ我も又明日は帰るの山路なりせは　春庵
行年も共にやこえむ旅衣比しも雪のしら川の関　正啓
旅衣たつ日より先かそふれは早くも年のけふに暮ぬる　光多
夢かとよ今年もけふに暮ぬとは思はて越る宇津の山道　千代
０５４
同日兼題
恋面影
うきにつけつらきにつけて見ゆるさへ猶にくからぬ人の俤　春庵
思ひわひつらしと思ふ其人のなと面影の身にはそふらん　正啓
かたはしを聞につけても思ひ出てそよ其時の人の俤　光多

忘らるるうき身なからも面影の猶うき人に恋しかりけり

０５５
同日当座
雨中鴈　舜庵千代
夕くれの雲のまよひにくる鴈の鳴音もきそふ村雨の空
河上鴈　正啓
川風もよさむになれはいつしかと初鴈かねそ鳴渡る也
葦辺鴈　直躬
難波江や芦の葉かくれなく鴈は見る数よりは多き声声
南北鴈　春庵
みきひたりをくれ先たつ鴈鳴て入日さひしき西の山の端

０５６
朝暮鴈　棟隆
霧深み数こそ見えね山本をあした夕へに渡る雁金
遠近鴈　光多
鳴渡るつはさは同し空なから雲に別るる遠近の鴈
宝暦十二壬午年
正月十二日兼題
当番　正啓
早春　光多
春といへは寒さぬるさも日にそひてやはらく風の心をやしる
むらむらに垣根の雪も解初て下草もゆる春は来にけり

０５７
をしなへて春の光やいたるらん霞初さる山の端そなき　直躬
春たつと思ひあへぬに山の端はまたきに霞む空の長閑さ　千代
古年の雪もけなくに春来ぬと霞初たる四方の山の端　正啓
同日当座
関駒迎
あふ坂の関路をこえて今宵しも都に出む望月駒　光多
八月十五夜
雲払ふ風に光はてりそひて月や名におふ今宵成らん　正啓
三日月　棟隆千代
暮果て夕日残らぬ山の端にほの見え初る三日月の影　棟隆
不知夜月
くれぬとて詠やれとも出かてにおもはゆけなる不知夜の月

０５８
廿日月　春庵
まち出ても松の木の間に見る程の名をやはつかの月といふらん　直躬
在明月
哀さはいつにまされりふくるよの雲間にほそき有明の月
正月廿五日兼題
会頭　正啓
山霞　舜庵
立そむる峯の霞に春の色を花より先に三芳野の山　光多

谷陰にまた消残る雪なから霞に埋む春の山端　棟隆

朝附日いつるほとのみあらはれて霞に埋む峯の槙原　直美

消やらぬ高根の雲も浅霞棚引山に春そしらるる　千代

はる日かけふりさけ見れは三笠山桧原をかけて霞む長閑さ　正啓

０５９

同日兼題

初恋

つらからん山のおくへはいさしらすけふ入そむる恋の山道　春庵

あさからす思ひそめてき恋衣色に出てや人に見せまし　光多

人しれす思ひそめぬるみつくきの深き心の程を見せはや　棟隆

袖ぬれてけふより思ひそめ川の淵瀬もしらす恋渡る也　直美

０６０

同日当座

未出月　千代

高根には影さしなからいてかての月に心を尽す山本　正啓

停午月　光多

いつはあれとわきてこよひは見る人の半天高くあふかさらめや　春庵

漸傾月

見るままに西の軒端にうつりゆく月影おしき秋のよの月　直身

０６１

欲入月　千代

詠つつ窓にさし入影ふけて山のは近く月そかたむく　棟隆

山月

哀さは花にもまさるなかめかな月の盛のみよしのの山　光多

初昇月

浮雲に月の光を先たてて山口しるくすみのほるらし　春庵

二月十一日兼題

柳

をしなへて木々のこの目の春風もわきて柳に見ゆるのとけさ　正啓

長閑なる春の夕はふくとなき風にもなひく庭の青柳　光多

吹方になひくすかたや青柳のいともかしこき御世の春風　棟隆

春風よ吹なみたりそ棹姫の染てかけたる青柳の糸　直躬

０６２

枝たはにむすへる露の玉柳なひくもあかぬ庭の春風　千代

浅緑霞の衣をりはへて長閑になひく春の青柳

同日当座

嶺月　春庵
霧晴るると山の松に影さして高根を出る秋のよの月
谷月　正啓
明くれに雲のおりゐる谷の戸はさし入月の影そすくなき
杜月　代
くもりなき影もみたれて吹風に木間もりくる月よみの杜
関月　秀覚
名もしるし清見が関の秋風に雲もへたてぬ波の月影
０６３　代
野月　戒言
風わたるのへの千草の露ちりて影もみたるる秋よの月
原月　棟隆
うき事もなくさみてまし旅人の月か片敷のはらしの原
二月廿五日兼題　光多
春月
さし出る山の端見えて大空も月の光にかすむ春のよ　春庵
秋霧の立も及はぬ哀さはいくへか霞む春のよの月　正啓
今更にすみうしとても難波江や入江の浪も霞月影　光多
おほろけにくもると見えて哀さも霞も深き春の夜月　棟隆
０６４
同日兼題
忍恋　正啓
下もえに身をやこかさむ人しれす思ひ入江の海士のもしほ火　光多
年月を忍ふの浦のあま衣ほさてや浪の下に朽なん　棟隆
なひくともうき名はたたしかはかりに人目忍ふの浦の烟は
０６５
同日当座
橋月　光多
柴人も月の光をしるへにてよはにもわたる峯のかけはし
池月　春庵
さはるへき雲もみ草もなかりけり池のもなかにやとる月影
沼月　代　棟隆直躬
秋はまた浅香の沼の水のおもに夜深き月の影そすみける
沢月　代　春庵千代
しけりあふ野沢の水にやとるよは月もや草の枕ゆふらん
０６６
滝月　正啓
山風も浪音添て瀧の糸のよるはすからにすめる月影
河月　代　秀覚棟隆
よる波のよる共見えす名にしおふかつらの川の月のさやけさ
三月十一日兼題
帰鴈　春庵
さきそめてあかぬわかれを思へはや花よりさきにかへる雁金
いつしかと雲ゐはるかに行雁の霞に残る夕くれの声　正啓

咲花の錦もあるをかへるさにいかて霞の衣かりかね　棟隆

しかすかに都の花や見すてうきなきてそかへる春の雁金　直躬

０６７

同日当座

湊月　代

うなはらや湊まちかく松見えて夜船たとらぬ月のさやけさ　舜庵

湖月　直躬

もしほやく煙もたえぬ鳰の海はわきてくまなき秋のよの月

浦月　春庵

さよ中になるみの浦の沖かけてひかたはるかに月そみちぬる

江月　棟隆

秋のよの哀もふかくみしま江や芦まの浪にすめる月影

０６８

磯月　正啓

詠やる浦わはるかに月澄て磯打浪のよるとしもなき

渚月　棟隆

秋のよは浪もさやかにいせの海の清きなきさによする月影

三月廿五日兼題

里款冬　春庵

里人も春の名残を思ひつつあかてめつらん山吹の花　正啓

光多

棟隆

口なしの色にさけとも人とへはそこといふきの里の山吹　棟隆

０６９

同日兼題

祈恋　直躬

うき中はいのる印もなかりけり同しつらさの三輪の神杉　春庵

正啓

さりともと逢瀬を祈貴船川つれなき人に思ひこかれて　光多

０７０　棟隆

同日当座

崎月　直躬

ささ浪のよるはすからに月影のくまなく澄める志賀のから崎　正啓

嶋月　春庵

うなはらや千里をかけてすむ月の光にうかむ奥津嶋山

潟月　棟隆光多

あしそよくなにはの浦の秋風に干かたによする浪の月影

泊月　代春庵千代

つつみてもゆかはやあかてあかしかた袖にわかるる波の月かけ

渡月　行前直躬

風越る槙のお山に雪消て宇治の渡りにすめる月影

０７１

里月　棟隆

秋のよをたれいたつらにすか原やふしみの里の月のさやけさ
四月十一日兼題
会頭　棟隆
遅桜　舜庵
外のみなちりての後に桜花咲るなさけはをくれしもせす
夏かけて咲やみ山のをそ桜青葉にましる色も珍らし　正啓
072
同日当座
禁中月　正啓
みかきなす玉のみはしは久方の月の光りもてりわたる也
社頭月　直躬
跡たれし神代のままに今も猶光りくもらぬ月よみの宮
古寺月　舜庵
高野山なに暁を松風のふくるもつらき秋の夜の月
古郷月
きて見れはのきもまかき（も）あれはてて月のみすめるふる郷の庭
073
水郷月　道生
波よするなるみのうらのあしのはにかけもほのほの秋のよの月
山家月　棟隆
すむ人はまたなき秋の山里にあはれをそへて月そとひくる
四月廿五日兼題
庭新樹　舜庵
日にそへてしけるも淋し見し花の面影かるる庭の青葉は
朝風にうち敷露の玉柏みとりそひ行庭の涼しさ　正啓
かけ深く青葉しけりて此比は月たにもらぬ庭の木の本　光多
074
同日兼題
待恋　春庵
こぬ人の袖にもふくやさよふけてみにしみまさる宿の松風
なをさりに契置ける夕暮を思ひも捨すまつそはかなき　正啓
かならすとさしも契てまつよははねよとの鐘にうちもねられす　光多
075
同日当座
田家月　正啓
もりあかす門田の稲葉露しけみやとれる月の影のさやけさ
閑閣月　直躬
秋のよをひとりなかめし月影もわかるるねやの曙の空
荒庭月　春庵
あれ果て野らなる庭の草葉にも光やつれぬ露の月影
船中月　棟隆
さして行よるへたとらし秋のよは月もあかしの浦の舟人
076
依月客来　光多
あふ坂の草の庵もさねかつらくるれは月に人そとひくる

毎秋馴月　光多

秋ことになれてもあかす見る月のかけしも深きあはれそひぬる

後四月十一日兼題

卯花　春庵

ふかかりしふち山吹の色かへて又めつらしく咲る卯花

春くれて庭の桜はちりぬ共うの花月夜人もとへかし　正啓

月と見てよるもやこえん白妙の卯花山の夕くれの空　光多

月雪にまかふ垣ねもあかさりし春のへたてと成は卯花　棟隆

時しらぬ雪とや見まし山里の垣ねあまたに咲る卯花　千代

同日当座

愁人対月　代戒言棟隆

よのうさはなくさめかねつさらしなの里ならねとも月にむかひて

０７７

月旅人友　光多

さよ深くしらぬ野山をこえ行けは月より外に又友もなし

野分風　舜庵直躬

ふきおりしまかきの竹のふしなからさくや野分の朝顔の花

野鶉　秀覚十代

きけは猶なれもうつらの声す也伏見の野への草の枕に　春庵

江鶉

秋ふかき真野の入江の夕暮に浜風すこく鶉鳴也

寝覚鳴　正啓

寝覚して聞けは山田に立鳴は羽音も寒き暁の空

後四月廿五日兼題

閏四月郭公　春庵

己か時待やわふらん忍ひ音の月もかさなる山時鳥

初音より後のう月のけふ迄もまたぬ日そなき山ほとときす　正啓

安くのみ人にかたるな時鳥後のう月も忍ふ心に　光多

別恋

鳥かねも露けき袖に鳴そへて名残尽せぬきぬきぬの空　正啓

なくさめて書はやれ共別てふもし社いつもうたてかりつれ　光多

０７８

同日当座

沢鳴　光多

いく秋かふるのの沢にたつ鳴の羽音も淋し夕暮の比

駅路霧　正啓

大江山いくのの末も霧こめてむまやちたとる秋の旅人

梯上霧　戒言棟隆

山人のゆききも見えす秋はたた霧立わたる峯のかけはし

霧底筏　春庵

波さはく音はかりして河霧のそこ共見えすくたす筏は

霧隔帆　直躬

塩風に霧のひまひま見ゆれ共まほにはあらぬ沖の釣舟

０７９
霧隠袂
明わたる二見か浦の朝霧に釣するあまの袖も見えせす

秀覚上代